

【小・中学生の部受賞作】

「やました」さんは、田中さん

「たきがら」さんも、田中さん

「くめさま」も、田中さん

成増の屋号を調べる

板橋区立成増ヶ丘小学校4年 さかもと 坂本 いつき 伊津生

・なぜ調べようと思ったか

ぼくは、「かngoや」の伊津生です。

昨年、「成増里神楽」について調べていたときに、おじいちゃんが田中さんのことを「やました」と呼んでいて、ぼくは不思議に思いました。おじいちゃんになぜかと聞いてみると、「屋号で呼んでいるんだよ。」と教えてくれ、そこで初めてぼくは屋号を知りました。

さらに聞いてみると、ぼくの家にも屋号があることがわかりました。それが「かngoや」です。成増で生まれ育ったぼくのおじいちゃんによると、ぼくの家屋号の「かngoや」は「かご」がなまってできた言葉で、おじいちゃんが生まれるずっと前のご先祖様が、家の周りの竹林の竹を切ってかごをあみ、それを売って生活していたからだそうです。竹であんだかごは通気性がよく、梅干しなどを作るのにぴったりだったそうです。

・屋号とは何か

そもそも屋号は何かというと、おじいちゃんいわく、明治時代より前の人は武士やき族といった人以外は苗字を持っていなかったの、屋号ができたのではないかと、ということでした。「かngoやの次男」や「やましたの奥さん」というように、屋号が苗字の代わりにしてくれて、どこの誰かがすぐにわかるというわけです。

次にぼくが疑問に思ったのは、ぼくの家は仕事から「かngoや」という名前がついたけれど、「やました」はどういう由来なのだろう、ということです。そういえば、ぼくが小さい頃、よくおばあちゃんに「やまのいえにおとどけものをしてきて」とよくたのまれたりしたけれど、「やました」と「やまのいえ」は、何かつながりがあるのでは、と気になり、自分で考えてもわからないので、取材に行くことにしました。

・取材開始

まず最初に取材をお願いしたのは、「たきがら」の田中さんです。田中さんによると、天明（一七八一～一七八九年）に「なべや」という家から分家されたそうです。「なべや」という屋号は、お金持ちのことを意味するようです。「たきがら」という屋号は、住んでいたところに滝があったからだそうですが、その滝は自然の滝ではなく、茶畑のために人工的に作ったものだそうです。

次に「やました」の田中さんに取材しました。「やました」というのは、その名の通り山の下に家があったからだそうで、反対に「やまのいえ」は、山の上に家があったから、ということでした。

次に、「じょうしき」の久保さんにも取材しました。もともと、今の成増四丁目辺りは、昔「増しき」という地名があったそうで、それがなまって「じょうしき」となったそうです。「じょうしき」の久保さんによると、屋号で呼ぶと、どこに住んでいるのかや、家業がわかる、また家のつながりがわかるそうで、つまり家のニックネームのようだ、とおっしゃっていました。

「にしやま」の久保さんと、「したのうち」の田中さんにもお話をうかがったのですが、みなさんの屋号も、地名からついたようです。

昔、成増には七十世帯ほどしかなく、みんな家族のようなもので、助け合い、協力し合いながらくらしていたそうです。

もう一人お話をうかがいました。ぼくの住んでいる成増という地名の語源となったとも言われている田中成益さんの子孫の田中さんです。こちらの田中さんの屋号は、「くめさま」です。ご先祖様に、久桑次郎さんという、この地域をよくしよう、と努力された方がいて、そんけいの意味をこめて「くめさま」と地域の人が呼びだしたそうです。また大変由緒正しい家でもあり、公家様と呼んでいたこともあったそうです。田中さんに家系図を見せてもらおうと、そこには久桑次郎さんが安永三年（一七七五年）生まれと書いてあり、「たきがら」の田中さんと同じ時期に屋号が使われはじめたのかもしれない、と思いました。

・消えゆく屋号

ぼくのお父さんやおばさん（お父さんの姉）は、屋号を知っていて使っている世代だけれど、ぼくやぼくのいとこもふくめて、若い世代は屋号を使わないばかりか、知らないのではないか、そしてなくなっていくのではないかと、思ったので、そのことを取材したみなさんに聞いてみました。「今の時代、屋号を使う必要もないから消えていくのはあたり前、使わないからわからなくなり、わからないから使わなくなる。そして消えてしまう。」

「さびしいと言えばさびしいけれど、昔そういう文化があったな、とだれかが思い出すぐらいなのでは」などとおっしゃっていました。

・おわりに

今回ぼくに屋号の歴史や文化を教えてくれたおじいちゃんや、取材に心よく応じてくれたみなさんのおかげで、少なくともぼくには屋号という一つの文化が受けつがれたような気がして、ほこらしい気持ちになりました。

ぼくの友達に屋号を使って呼んでいる人はいないけれど、もしかしたら知らないだけ

で、その家に屋号があるかもしれない。それに、新しい屋号を付けたらおもしろいかも
と思いました。たとえば、「コンビニ前」や「プール横」など、ニックネームとしては変わっ
ているけれど、聞く人が聞けば誰かわかる、今の時代に合った使い方をして面白いと
思います。今回調べきれなかったたくさんの屋号については、これからも調査を続けて
いきたいと思っています。

人々の暮らしとお多福弁天～谷端川への祈りの変化～

板橋区立板橋第四小学校 6年 ^{やさき} 矢崎 ^{あきと} 瑛

下板橋駅に向かう途中のマンションのそばに、お多福弁天というほこらがある（写真1）。ぼくは下板橋駅をよく使うので、その前を通るときに、手を合わせている人を見かけることがある。お多福弁天にあるプレートには、四百年以上前にここに古い沼があり、人々はそれを「お多福弁天沼」と呼んでいた、お願いをするとたくさんの幸福を授けてくれる弁天様がまつられていたと書いてある。沼には弁天様の使いである白蛇がすんでおり、見た人に幸福を与えてくれたとも書いてある（写真2）。いま下板橋の辺りにあるのは谷端川の暗渠で、そのほかに水に関わるものはなさそうである。ぼくは、むかしの下板橋駅の辺りには何があったのか、弁天様とどのような関係があるのかに興味を持った。そこで、弁天様や谷端川について調べることにした。

弁天は、弁財天とも言い、バラモン教の神であるサラスヴァティに由来する。サラスヴァティは、河川の神、水の神であるが、水の流れる音から音楽の神、弁舌（智慧）の神としても信仰されている。水との関係で蛇や龍とも結びついたものが多い（佐藤・田村、2013）。蛇は古代エジプトの時代から豊穡の象徴として信仰されていて、日本でもその象徴とする信仰が伝承されてきた。日本には蛇に関する伝説や信仰が多数あり、庶民の間では蛇体の神は、水を支配する神と信じられた（高野、1967）。

谷端川は、豊島区要町になる栗島神社付近の湧水を水源にする神田川の支流の一つである。この川の生成は、紀元前三百年から一五〇〇年以前にさかのぼると考えられている。鎌倉・室町時代は栗島神社の弁天池の自然湧水をかんがい用水としていたので、わずかな水田がその流域にあった。江戸時代に入り、玉川上水より分水された千川上水が谷端川に分水されると水量が急激に増え、水不足に悩んでいた谷端川付近の長崎、池袋、板橋の中丸、金井久保、巣鴨などの村では、一七〇〇年に水料を納めることでかんがい用水として使えるようになった。それ以降、沿岸の農民に大きな恵みをもたらした。しかし、安政の大地震のときに洪水があり、中丸町の一部の農家は高台に移ったことや、その後もしばしば洪水に見舞われた記録が残っている（板橋区教育委員会、1986）。谷端川は、一九六四年までに全区間が暗渠化された。谷端川と千川上水的位置は地図をつなげて確認した（図1）。

つぎに、お多福弁天の近くで、いまから約六十年前から営業しているタカセ板橋店に話を聞きに行った。店員さんは、お多福弁天に手を合わせている人をよく見かけると言っていた。営業中であるため、店員さんに質問のメモを渡し、後日取りに行くというやり方を勧められた。質問は、①お多福弁天について、②この地域と谷端川の関係、である。店員さんは、この辺りに長く住んでいるというお客さんにも話を聞いてくれた。

お多福弁天は奥さんを亡くした男性が建てたもので、タカセの辺りでは家内安全にご利

益があると言われていることがわかった。谷端川は、そこまで大きな川ではなかったが、一九五八年九月の狩野川台風のときは、下板橋駅付近にあったたたみ屋さんなどが浸水したそうである。

古くからある近隣のお寺や神社でも話を聞いた。ぼくが通っていたかないくぼ保育園のすぐ近くにある宗仙寺で、この地域で育った住職の奥さんから、谷端川沿岸であった下板橋駅の辺りは田んぼで、谷端川が暗渠になる前はよくはんらんして、浸水していたことを教えていただいた。谷端川の話は奥さんのお父さんがよく話してくれたが、高齢のためいまは話をするのは難しいということだった。つぎに、子易神社の宮司さんにお話を聞いた。谷端川にかかっていたらん干は子易神社にあるが、むかしの様子についてわかることはないとのことだった。いまこの辺りに住んでいる人たちは地方から来ているし、むかしのことを知っている人たちはほとんど亡くなっているそうである。池袋氷川神社でもお話を聞こうとしたが、宮司さんは地元の方ではないということだった。栗島神社では、宮司さんの話から、むかしの東上線の沿線は田んぼであったことが確認できた。境内にある弁天池の水は、以前は湧水であったがいまは枯れていてポンプでくみ上げている（写真3）。弁天様をまつているので、どのようなお祈りをしていたのかを聞くと、水がよく流れながらも、流れ過ぎてはんらんすることがないように祈っていたそうである。

下板橋駅を中心に、千川上水や谷端川の付近について東京時層地図で調べると、文明開化期（1876～1886年）の金井窪村は、田んぼと畑が広がっているが（図2）、明治の終わり（1906～1909年）にはほぼ田んぼになっている（図3）。関東地震直前（1916～1921年）は、十七号線沿いやJR板橋駅向かう沿線に宅地が増えているが、下板橋駅付近はまだ田んぼが多かった（図4）。昭和戦前期（1928～1936年）になると、ほぼ建物で田んぼは見当たらない（図5）。

これらの土地利用の変化や、谷端川が暗渠になるまでの流れから、この辺りで生活していた人々は、むかしは谷端川が田んぼをうるおして実りがあるように、田んぼが宅地になってからは、谷端川があばれて人々の生活をおびやかすことがないように、お多福弁天沼にお願いをしていたのではないだろうか。しかし、移り住んできた人が多く、むかしのことを知っている人たちが少なくなり語れなくなっていくと、その土地に伝えられ信じられてきたものが失われていく。お多福弁天は、失われつつあるものをつなげる役割と、いまここで生活している人たちの願いを聞く役割を担っているのかもしれない。

今回、谷端川とその近隣地域について調べて、むかしからあるものはむかしのことをいまに伝えるだけでなく、人々の関わり方を教えてくれるものでもあることに気づいた。それは祈りの内容も同じで、長い期間を観察する重要性を学ぶこともできた。

参考文献

板橋区教育委員会（1986）『いたばしの河川：その変遷と人々の暮らし』文化財シリーズ

第五二集、板橋区河川調査報告書

佐藤建一郎・田村善次郎（2013）『祈りの民俗誌』、八坂書房

菅原健二（2007）『川の地図辞典 江戸・東京／二三区編 三訂版』、之潮

高野進芳（1967）「農耕と弁才天信仰との関係」『民族学研究』、日本民族学会第4回・第5回研究大会報告要旨、57～58

お話をうかがった日と場所

年月日	場所
2022年8月13日	宗仙寺（板橋区）
2022年8月13日	子易神社（板橋区）
2022年8月15日	粟島神社（豊島区）
2022年8月22日、25日	タカセ板橋店（板橋区）



写真1 お多福弁天

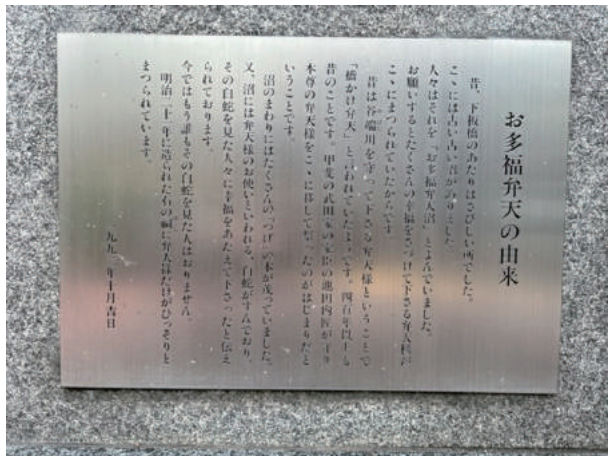


写真2 お多福弁天のプレート



写真3 粟島神社 弁天池

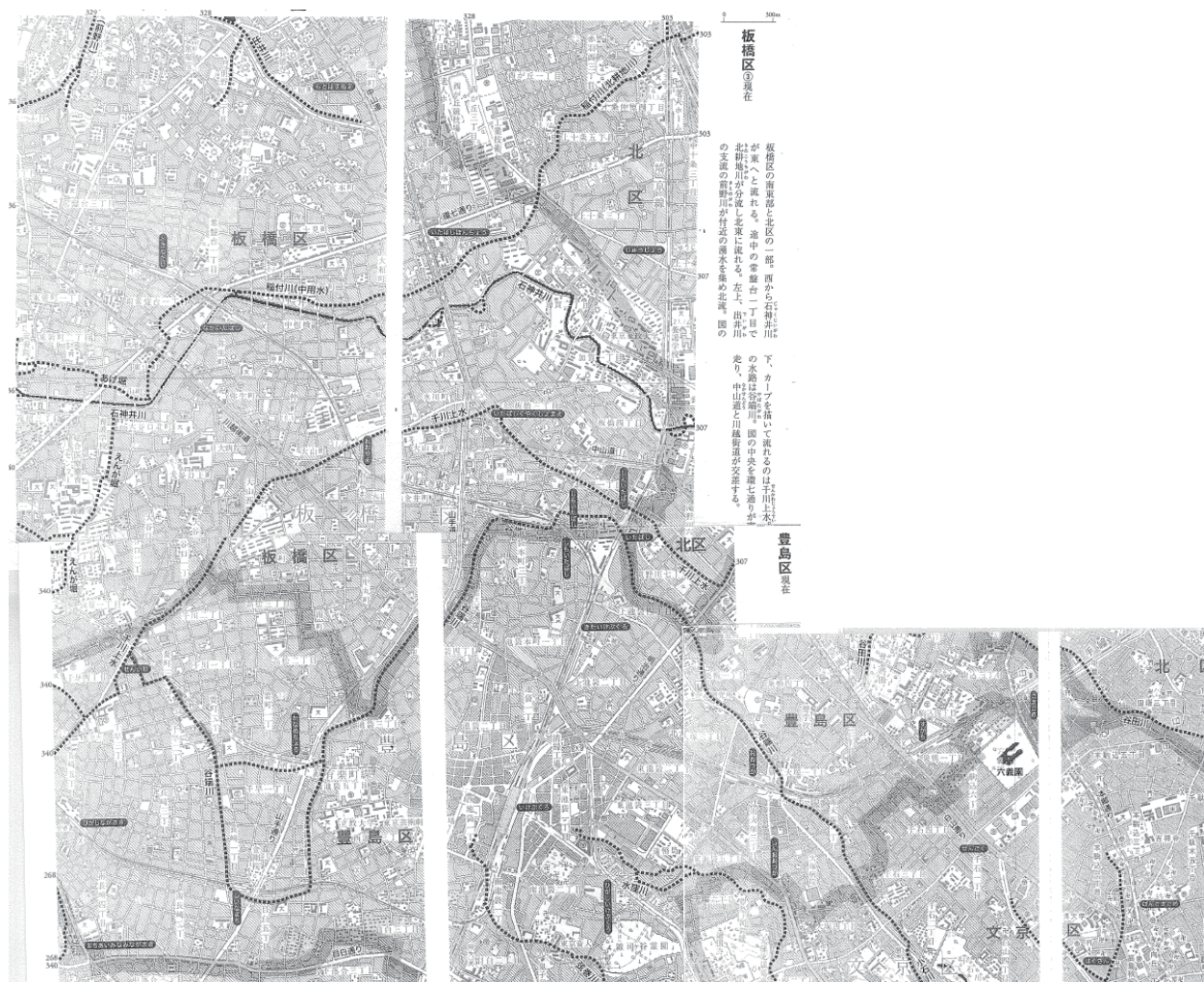


図1 谷端川と千川上水の位置 (『川の地図辞典 江戸・東京／二三区編 三訂版』)

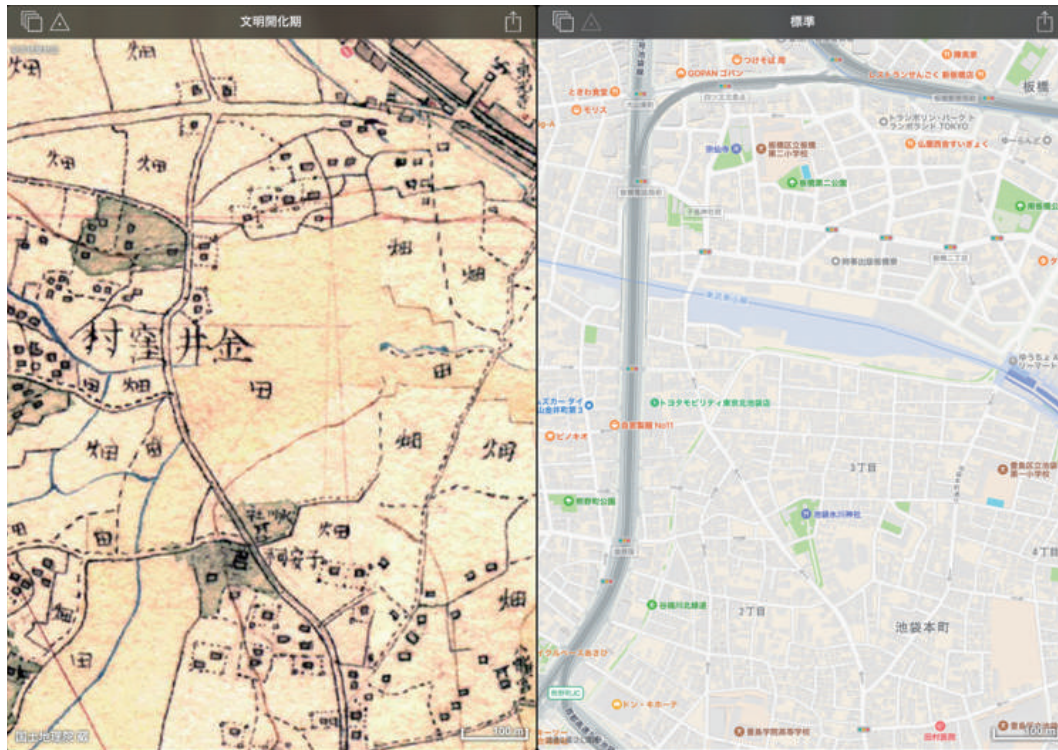


図2

(日本地図センター「東京時層地図」※この地図は(一財)日本地図センターが作成した「東京時層地図」を使用しました。)

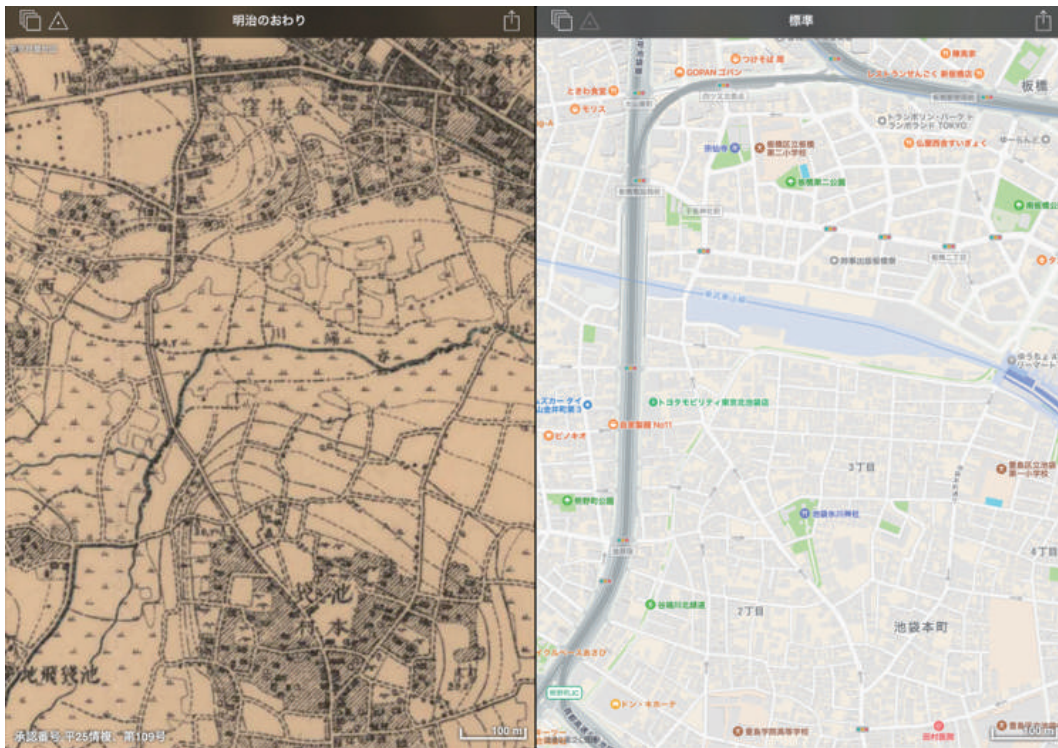


図3

(日本地図センター「東京時層地図」※この地図は(一財)日本地図センターが作成した「東京時層地図」を使用しました。)

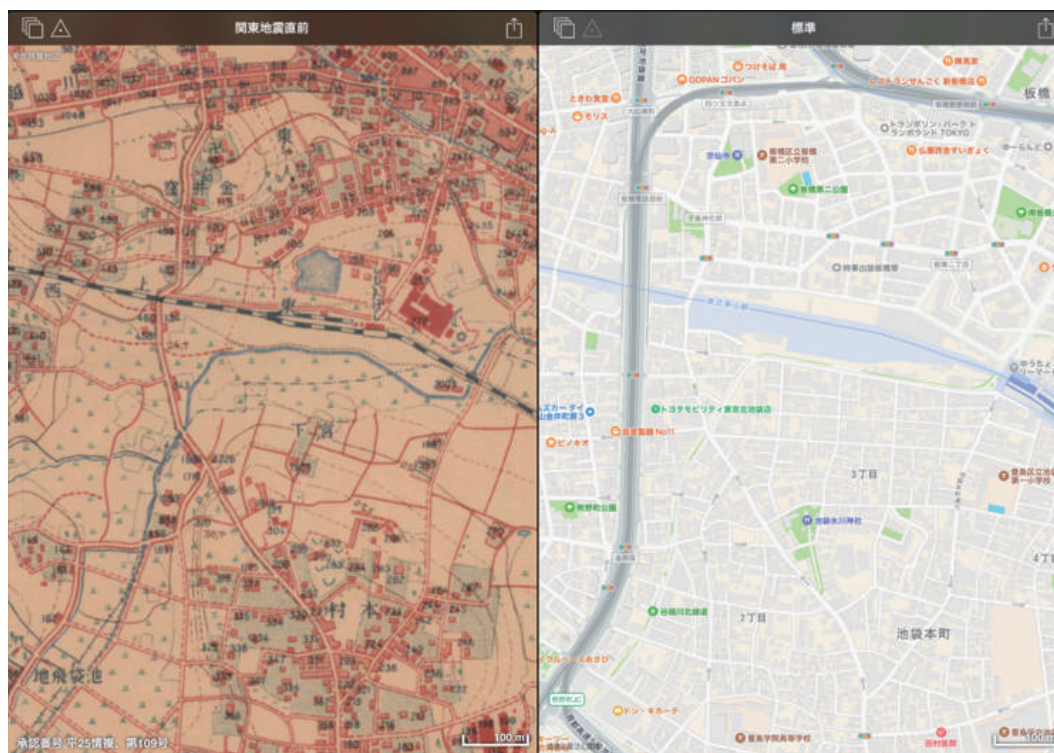


図 4

(日本地図センター「東京時層地図」※この地図は(一財)日本地図センターが作成した「東京時層地図」を使用しました。)

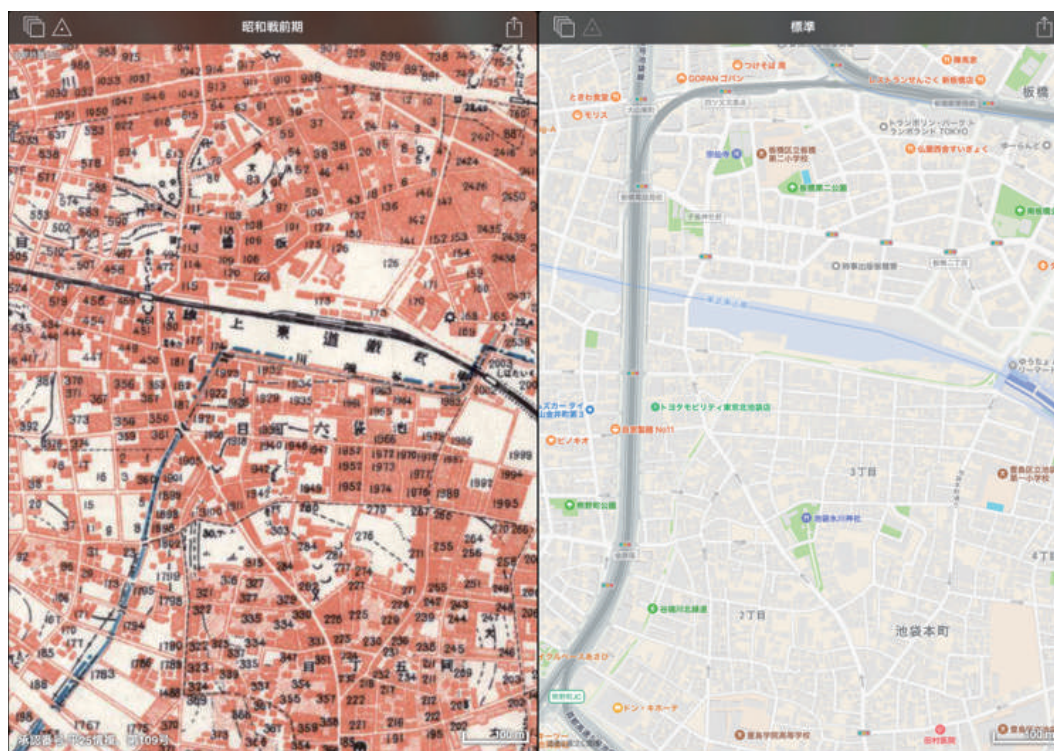


図 5

(日本地図センター「東京時層地図」※この地図は(一財)日本地図センターが作成した「東京時層地図」を使用しました。)

大切にしたい徳丸槿の道

板橋区立志村第五小学校5年 せのお あかり 妹尾 茜里

私の家の前には、「徳丸槿の道」という並木道があります。槿の葉っぱや枝が伸びてくると、お手入れする人たちが来て、丸い形にかりこんでいつもとてもきれいにしてあります。私は、この道には何か意味があるのだろうかと思い調べてみることにしました。

槿は、昔から中国や日本で縁起が良く、じょうぶな木として庭木に植えられることが多いそうです。葉を丸く仕立てる「玉散らし」は、りゅうがのぼるすがたや、雲のように見えて運気が上がるとされています。

実際に槿の道を歩いてみると、全部で二百二十三本ありました。板橋区の街路樹マップを見ても、槿（ラカンマキ）を並木にしているのは区内でもここだけでした。ある資料で、徳丸槿の道は、昭和四十年から平成三年まで徳丸ヶ丘地域で行われた区画整理が完成した記念につくられたことがわかりました。昔、このあたりは台地でがけのような急な坂が多く、人々は徳丸田んぼ（今の高島平）に行き来するのが大変でした。この区画整理で何メートルも土をけずってゆるやかな坂をつけたり、細い道を広げたりして、地域の中の移動が楽になりました。私は、昭和のころの徳丸ヶ丘地域の写真を見て、今と全く風景がちがうのでとてもおどろきました。この区画整理に関わっていた地元の人たちが自分たちのシンボルになる道として槿の街路樹を植えたそうです。その後板橋区に寄贈して、今では区が管理しています。当時、この地域の人たちが槿を「シンボル」として選んだ理由を知りたいと思いました。

近所の郷土芸能伝承館の方にげんかん前の大きな槿の木についてたずねました。これも区画整理の完成記念に植えられたそうです。庭木として、家の門の上に枝の一つをのぼす「門かぶり」という仕立て方もあると教えてくれました。

伝承館から五分ほどの旧粕谷家住宅の庭にとっても大きな槿の木が立っていたので、中に入ってガイドの方に話を聞いてみました。お屋しきは築三百年で、元々は名主だった粕谷家のご神木として植えられているそうです。後で粕谷家の資料を見てわかったのは、この槿は家を建てるときに今の徳丸三丁目にあった出頭山（でがしらやま）から持ってきて植えたということです。ガイドの方によると、最後に住んでいた九代目の粕谷尹久子さんは、徳丸ヶ丘土地区画整理組合の理事を務めて、徳丸の町づくりに積極的に関わっていました。

他にも千四百年ごろからある安楽寺や松月院に大きな槿が何本もありました。また、徳丸六丁目や七丁目、八丁目には庭木に槿を植えている家がたくさん見つかりました。中には、家の入り口に門かぶり仕立てしている家もありました。最近建った家ではなく、昔からあるような家に槿があったので、郷土資料館で徳丸に古くからある槿について教えてもらいました。安楽寺（徳丸八丁目）のまわりには旧家が多いそうです。旧家とは、名主や五人組の組頭などの村役人を代々受けついできた家です。板橋には田遊びという千年も続

く伝統行事がありますが、これに参加していた十六の家も、その旧家をついできた人たちだということがわかりました。

いろいろな資料を見たり、人から話を聞いたりして徳丸の今まで知らなかったことがわかりました。そして、区画整理に関わった人たちが街路樹に槇を選んだ理由について考えてみました。槇は、縁起の良い木として、徳丸のあちこちに植えられ、昔から人々になじみのある木だったと考えられます。区画整理で自分たちの土地を出し合い、二十六年苦勞して新しい町を作りました。その町が良い町に発てんするように願って槇を選んだのではないか、と思いました。

槇の道を管理している板橋区に問い合わせしてみたところ、区役所の都市計画課の方に直接話を聞くことができました。いろいろな部しょに槇が選ばれた理由について聞いてくれましたが、当時のことを知る職員はもういないそうです。しかし、徳丸の地域では槇を庭木として植えている家も多いことから、昔から地元の人に親しみのある木として選んだのではないか、とのお話でした。

区は、槇の道を「景観重要公共施設」に指定し手入れしています。区民に身近な槇と板橋の特ちょうでもある坂道が合わさった区道として選んだそうです。また、槇の道をふくめて、徳丸から四葉、赤塚にかけての地域は、緑が多く特に景観を大切にしたい場所になっていることがわかりました。この中で新しくお店や住宅を建てる時は、なるべく自然にあるまわりの緑がきれいに見える色使いにしてもらえるか、建て主や業者の人と相談しているそうです。例えば、区立美術館のとなりにあるコンビニエンスストアは、いつもは赤、オレンジ、緑が目印ですが、ここは暗めの茶色にしています。かんぱんの色をおさえた方が自然の風景に溶けこむからです。こんなふう緑や景色を守る工夫がされていることを初めて知りました。

徳丸槇の道を調べてみて、今まで知らなかったこの地域の歴史や、槇の道にこめられた思いがわかりました。区画整理した人たちから受けついだ道や町、風景が今も大切に守られているのはすごいことで、うれしい気持ちになりました。徳丸を見守るシンボルとして、これからもずっときれいな並木道であってほしいと思います。

参考文献

- 「板橋区街路樹マップ まちのみどり どうろのみどり」板橋区 2000年
- 「いたばしグリーンプラン2025」板橋区土木部みどりと公園課 2018年
- 「板橋区景観計画」板橋区都市整備部都市計画課 2022年4月改訂
- 「板橋区指定文化財 旧粕谷家（東の隠居）住宅 保存活用計画」板橋区教育委員会 2015年
- 「文化財シリーズ第94集 いたばしの田遊び」板橋区教育委員会 2015年
- 「みのりの道」徳丸ヶ丘土地区画整理組合 1991年

インターネット

お庭の窓口 マキ（槇）の木の育て方や特徴

<https://oniwa-madoguchi.com/books/038/>

庭木の剪定の仕方

<https://niwaki.info/makinoki-engi#>:

協力してくださった方

板橋区立郷土芸能伝承館の方

旧粕谷家住宅のガイドの方

板橋区立郷土資料館の学芸員の方

板橋区都市計画課都市景観係の職員の方々

板橋区区政資料室の方

徳丸北野神社の方

みんなにあいされているうばがばしのお地ぞうさん

京都市立御所東小学校2年 ^{かわち さと か} 河内 里香

家の近くに、お寺みたいな小さいものがあります。それは何かなと思って、お母さんに聞きました。お母さんは「お地ぞうさん」と言いました。わたしはよくお地ぞうさんの前をとおって、プールに行きました。お地ぞうさんのところにはよく人がいて、その人たちは何をしているのだろうと思いました。それで「うばがばしのお地ぞうさん」についてしらべました。

さいしょに「お地ぞうさん」とはどんなものかをお母さんと一しょに本でしらべました。地ぞうはもともと仏教のぼさつ、地ぞうぼさつです。子どもをまもり、人々のねがいごとをかなえてくれると言われていています。日本に「地ぞうしんこう」がたわったのはなら時代で、へいあん時代のわりころには人々に広がったそうです。お地ぞうさんはとても長い間しんじられています。

北区十じょうの「うばがばしえん命地ぞうそん」は大きい道のよこにあります。右がわに「えんめい地ぞうそん」、左がわに「子そだて地ぞうそん」があります。「子そだて地ぞうそん」はすこし小さいです。近くにせつめいばんと石ひと「これより右 王子」「これより左 川口」と書かれた石のとう（こうしんとう）があります。このお地ぞうさんは1724年に作られました。

わたしはおまいりしていた人にインタビューをしました。①お地ぞうさんの前で何をしたか、②よく来ているか、③近くにすんでいるか、④何のためにおまいりをしたか、⑤だれがお地ぞうさんのそうじをしているかを知りたかったからです。1回30分お地ぞうさんのところにおいて、インタビューをしました。ぜんぶで8回しました。おまいりを見てから、「よく来ていますか」「近くにすんでいますか」「どうしておまいりをしたんですか」としつもんしました。さいしょの人に「よく来ていますか」と聞いたらびっくりされたので、次からは、はじめに「すみません。自ゆうけんきゅうでお地ぞうさんについてしらべています。ちょっと聞いてもいいですか」と言うようにしました。インタビューはいろいろな時間にしました。

8回しらべたら、33人がお地ぞうさんにおまいりをしていました。そのうち24人にインタビューができましたが、9人は歩きながらや自てん車にのりながら頭を下げたり、かた手でおがんだりしていたので、インタビューができませんでした。いそがしい人や大きい道のよこでおいのりするのがはずかしい人がいると思いました。心の中でおいのりをしている人もいるかもしれせん。

①おまいりの時、何をしているか。

おさいせんを入れて、おいのりしている人がおおかったです。おいのりが長い人もいてびっくりしました。お線香に火をつけた人はあまりいませんでした。

②いつも来ているか。

いつも来ている人が多かったです。でも、ときどきの人もいました。

③近くにすんでいるか。

近くにすんでいる人が多かったです。近くにすんでいない人は、近くではたらいっていました。わざわざとおくから来ている人もいました。

④どうしておまいりをしたか。

年をとった人がおおかったので、けんこうのためにおまいりした人が多かったです。ぐあいがわるい人もいました。このお地ぞうさんにおまいりしたら、ガンの家ぞくが5年間生きられた話も聞きました。しごとのためという人や、コロナがなくなるようにいのった人もいました。

それから、せんそうの時、十じょうにすんでいたおじさん、おばさんが空しゅうでたすかったので、お地ぞうさんにかんしゃして月1回来ている人がいました。その人はおじさん、おばさんに、うばがばしがあったから、このへんの人はたすかったと聞かされてきたそうです。せつめいばんには、子どもを川におとしてしなせてしまったうばがじさつしてしまったので、うばのくようのために作られたと伝えられていると書いてあります。それから、石ひには、はしのあん全くようのためと書かれています。インタビューでせつめいばんにのっていないことが聞けました。

⑤だれがそうじしているか。

8回目でそうじをしている近じょの女の人に会えました。たくさん話がきけました。前、そうじをやっていた人がびょうきなので、みんながボランティアでそうじをしているそうです。わたしは一人の人がそうじをしていると思いましたが、わたしのお母さんは町の人がとうばんでしていると思っていたので、ボランティアと聞いてびっくりしていました。

お地ぞうさんは、町の人みんなに大切にされていることがわかりました。

それから、インタビューで8月24日にえん日があることを教えてもらいました。その日の夜、わたしはきょうとにひっこしました。だからひっこす前にえん日を見ることができました。線香のたばを買って火に入れて、しあわせにくらせますようにとねがって、おいのりをしました。ひっこす前におまつりに行けてよかったです。

きょうとに来たら、お地ぞうさんがたくさんあって、びっくりしました。きょうとはどうしてこんなにたくさんお地ぞうさんがあるんだろうとふしぎにおもいました。またしらべてみたいです。

見た本、ホームページ

『お地ぞうさんの世界—すくいの説話・れきし・みんぞく—』わたりこう一、2011年、けい友社

『とうきょうまちかど お地ぞう・いなり・石とうめぐり』さとうテツ、2013年、こうさ

いとうしゅっぱん

『みたい！しりたい！しらべたい！日本のかみさまずかん①ねがいをかなえるかみさま』
まつおこういちかんしゅう、2012年、ミネルヴァ書房
学けんキッズネットのじてん <https://kids.gakken.co.jp/jiten/>

【しりょう】インタビューのけっか

() のばんごうの人にはインタビューができませんでした。

1回目：8月3日(水) 7:45～8:15

えん命地ぞうに缶コーヒーとおかしがおそなえされていました。

人	時間		インタビュー
1	7:45	男	①お線香、えん命と子そだてにおさいせん、おいのり。 ②いつも来ている。 ③近く。 ④— ⑤おとなりの人がそうじをしている。
2	7:53	女	①えん命と子そだてにおさいせん。長いおいのり。 ②いつも来ている。 ③近く。近くではたらいている。 ④中国人。中国にいるときからお地ぞうさんをしんじている。
(3)	7:57	女	自てん車にのりながら、お地ぞうさんにおじぎをした。
4	8:03	男	①えん命におまいり。 ②ときどき来る。 ③— ④— いそいでいて、あまり話してくれなかった。
(5)	8:12	男	わかい人があるきながら、かた手でおがんだ。

2回目：8月4日（木）7:20～7:50

かんコーヒーとおかし、お線香がなくなっていました。

人	時間		インタビュー
6	7:48	女	きのうの2番の人がまたおまいりをしていた。

雨がふっていたからか、1人しか来ませんでした。

3回目：8月5日（金）9:15～9:45

かんをあけたらお線香が入っていました。せんべいがおいてありました。

人	時間		インタビュー
7	9:17	女	①えん命と子そだてにおさいせん。長いおいのり。 ②毎日来ている。 ③近く。けっこんしてここにひっこしてきてから40年、来ている。 ④いろいろなやみがあるから。
8	9:20	男	①えん命におさいせん。おいのり。お線香。 ②バスでいに行くところなので、ほとんど毎日来ている。 ③近く ④—
(9)	9:25	女	自てん車にのりながら頭を下げた。
10	9:27	男	①おまいり。 ②毎日来ている。 ③近くの会社ではたらいっている。 ④えん命だから。
(11)	9:37	女	歩きながらお地ぞうさんに手を合わせた。
(12)	9:44	女	自てん車にのりながら、かた手でおがんだ。

4回目：8月6日（土）12:15～12:45

子そだて地ぞうのマスクが下げられていました。

人	時間		インタビュー
13	12:19	女	①えん命、子そだてにおさいせん、おいのり。 ②毎日ではなく、ときどき。 ③— ④— 他：8月24日におまつりがあると教えてくれた。
14	12:23	女	①えん命、子そだてにおさいせん、おいのり。 ②足がわるいから、たまにしか来ない。 ③近く ④—
15	12:24	男	①えん命、子そだてにおさいせん、おいのり。 ②お地ぞうさんの近くに来ると、おまいりする。 ③近く。 ④—
16	12:40	女	8月5日（金）7番の人。 今日もえん命、子そだてにおさいせん、おいのり。

5回目：8月7日（日）8:10～8:40

人	時間		インタビュー
17	8:15	男	①えん命、子そだてにおさいせん、おいのり。 ②週に2回ぐらい。 ③近く。 ④—
18	8:25	男	①えん命、子そだてにおさいせん、おいのり。 ②週に1回ぐらい。 ③近くに住んでいない。 ④—
19	8:32	男	①えん命と子そだてにおさいせん。おいのりはまとめて1回。 ②たまたまとおった。 ③近くにすんでいない。 ④えん命地ぞうって書いてあるから。
(20)	8:39	男	自てん車にのりながらお地ぞうさんに頭を下げた。

6回目：8月8日（月）7:15～7:45

子そだて地ぞうのマスクが上げられていました。かれた花がなくなっていました。

お地ぞうさんのとなりのとなりの家の方が道でそうじをしていたので、話しかけました。お地ぞうさんのそうじはおばさんがしているそうです。

人	時間		インタビュー
21	7:20	女	①えん命と子そだてにおいのり。 ②いつも来ている。 ③近く。 ④いつも元気でいられますようにとおいのり。
(22)	7:38	男	スーツをきた男の人がお地ぞうにあたまを下げた。
(23)	7:40	女	自てん車にのりながらお地ぞうに頭を下げた。
(24)	7:44	男	歩きながらお地ぞうに頭を下げた。
25	7:45	男	①すずをならしておいのり。 ②いつも来ている。 ③近く ④いつもけんこうでいられますようにとおいのりした。

7回目：8月8日（月）18:15～18:45

夜にも人が来るのか、そうじのおばさんがいるかを見に行きました。

人	時間		インタビュー
26	18:18	男	①えん命と子そだてにおさいせん。長いおいのり。 ②とおりかかった時。週に1回。 ③近く。 ④ぐあいかわるいから、けんこうになりますようにおいのりした。
27	18:30	男	①えん命におさいせん、おいのり。 ②いつも来ている。 ③近く ④しごとでせきにんしゃをしている。会社のみんながいつもがんばっているから、お地ぞうさんにかんしゃしておまいりした。
28	18:45	女	①えん命と子そだてにおいのり。 ②週に1回ぐらい。 ③近くにすんでいない。 ④けんこうと元気でいられるかんしゃのため。

8回目：8月9日（火）6:30～7:00

おまつりのお知らせがはられていました。

人	時間		インタビュー
29	6:33	男	①えん命においのり。 ②いつも来ている。 ③近く。 ④古いお地ぞうさんだから大切にしようと思っている。しごとでがんばれますようにとおいのりした。
30	6:35	女	①えん命と子そだてにおさいせん、おいのり。 ②いつも来ている。 ③近く ④コロナたいさん 他近くの家から出てきたので、そうじをしている人を知っているか聞いたら「私と母がしている」とこたえた。ボランティアで何人かがそうじしている。前にいつもそうじをしていた人は今、びょうきだからみんなですしている。となりの家の人もしうじをしていると思う。8月24日のえん日でとなりの人、となりのとなりの人がお線香をうる。
31	6:36	男	8月3日（水）1番の人。 えん命と子そだてにおさいせん、おいのり。 30ばんの人と一しょに話した。
32	6:40	ふうふ	①えん命におさいせん、おいのり。 ②ときどき来ている。月に1回。 ③近くにすんでいない。 ④子どもが元気でいられますようにおいのりした。むかし、おじさん、おばさんがこの近くにすんでいた。お地ぞうさんの近くにうばがばしがあったから、せんそうの空しゅうでこの近くはたすかったと聞かされてきた。だから、月に1回かならずおまいりしている。それで、近じょの人たちに大切にまもられていると思う。
33	7:00	女	①えん命におさいせん、おいのり ②平日は毎日。 ③近くにすんでいない。近くではたらいっている。 ④お母さんがガンとわかったけど、お地ぞうさんにおまいりしたら5年間生きられたから、けんこうをおいのりした。

学校給食があるということ

板橋区立板橋第五小学4年 ほんま けいと 本間 恵翔

「いただきます。」

ぼくはクラスのみんたと食べる給食が大好きです。人気のこん立はじゃんけんをして勝つともう一回食べられます。毎日こん立がちがって、食べられなかったものがいつの間にか食べられるようになっていきます。特に好きなこん立の日は朝からわくわくします。

今はこうして当たり前のように給食を食べているけれど、給食はいつ頃から始まってどんなものを食べていたのか、まずは年代別に調べてみることにしました。

- ・90代の近所のおじいさんは、戦争中だったので給食がなく家でも食べるものがなくて本当に困っていた。
- ・80代のぼくのおばあちゃんは、アルミのような皿に“脱脂粉乳”という味のないミルクぐらいしかなくて、いつもお腹が空くから家に帰ってパンを食べていた。
- ・70代のぼくのおじいちゃんは、脱脂粉乳しかなかった。
- ・60代のぼくのおばあちゃんは、ビンに入った牛乳、コッペパン、あげもの、中でもクジラ肉の竜田あげはおいしかった。
- ・50代からぼくたち10代は今食べているものとほぼ同じだった。

このように、昭和初期から令和まで、こん立の内容や量がどんどん変化していくことがわかりました。中でも脱脂粉乳は初めて聞きました。ぼくは牛乳は大好きだけれど、味のないミルクはうまく想像ができませんでした。

次に給食の歴史について調べてみました。明治22年（1889年）、山形県つる岡市にある寺子屋のような所で、恵まれない子ども達にかん単な昼食が無料で提供されたことをきっかけに給食が始まったそうです。その後、大正時代の始めに東京の一部の学校でパンだけの給食が行われたり、昭和19年（1944年）には、大都市の小学校にこめやみそなどが特別に配られ、その後かん単な給食が全国に広まりました。しかし、戦争が始まると給食を続けることが困難になりました。そして、第二次世界大戦後の昭和21年（1946年）、アメリカから「ララ」の名前で脱脂粉乳や缶づめなどの食料や衣類など、生活に必要な物が提供されました。昭和22年（1947年）、その中から食料75トンが戦後の栄養不足の子ども達のために学校給食が割り当てられて、本格的な学校給食が始まりました。ぼくは給食になぜ牛乳があるのかが気になりました。牛乳は栄養価が高く、子どもの成長をうながす大切な飲み物だということを広めたお医者さんがいて、牛乳はまた、ストローを使って飲むことによって時間をかけて消化ができるということを広めたそうです。

最後に、学校給食歴史館に行きました。そこは日本でただ一つの学校給食に関する博物館です。給食のレプリカが昭和22年から令和3年までたくさん並んでいて、ぼくが年代別に聞いたり調べていたこん立を見ることができました。ぼくが好きなこん立の一つのあげ

パンは、昭和27年頃から始まり、当時は体調が悪くて学校を休むと、近所の友達が給食のパンを届けてくれたそうです。その時においしく食べられるようにと、油であげて砂とうをまぶしてあげたらおいしかったと喜び、その後は関東中心に広まっていったそうです。順番に見ていくと、スプーンとフォークが合体したものがあり、使いにくそうだなあと感じました。なぜそれを使っていたのかを聞いてみると、“先割れスプーン”といい、当時は使いやすかったことと、コストが安くすむからだったそうです。しかし、うまく使えず、箸が上手に使えなくなることから、箸を中心にこん立によってスプーンも使えるように変わっていったそうです。他に食器も、アルマイトからプラスチック類、強化磁器と、こん立と同じように時代と共に変化していくこともわかりました。

また、歴史館には、昔の教室風になったスペースがあり、木製のこげ茶色の机とイスが並んでいました。実際に座ってみると、自然の木に座っているような、少しやわらかい感じがして心地よかったです。ぼくはこっちのほうが好きだなと思いました。

今では「全国学校給食週間」があり、給食の歴史をふり返り、食べ物や学校給食にかかわる多くの人に感しゃをしましょうという行事があります。ぼくが通う学校は、昭和19年（1944年）の学童給食から始まり、始めは食料不足で脱脂粉乳とかな油でしたが、昭和25年（1950年）になると、完全給食が始まったそうです。

ぼくの学校には調理室があります。栄養士さんがぼくたちの成長と健康のために「熱や力になるもの・体のもとを作るもの・体の調子を整えるもの」と、細かいカテゴリーに分けて毎日考えてくださったこん立を、調理室のみなさんが心をこめて作ってくださいます。けずり節や昆布、とりがらスープで出汁をとったり、カレーやシチューのルー、ドレッシングまで手作りしていると聞いた時はとてもおどろきました。今はこん立にないけど、昔の給食を先割れスプーンを使って食べてみたいです。

ぼくは食べ物に困った経験はありません。学校では温かい給食が待っているし、家に帰ればお母さんが作ってくれます。毎日学校給食を食べられているのは、貧しかった時代や戦争、災害などが起こるたびに直面するいくつものかべを、たくさんの人たちのアイデアとたくさんの方があって、つねに子ども達の成長と栄養のことを考えてくださったことを忘れてはならないと思いました。給食に関わる全ての方に感しゃしながら食べたいです。

今もおいしい給食をありがとうございます。

「ごちそうさまでした。」

伝統芸能未来へ続け

板橋区立弥生小学校4年 みつもと いろは 光本 彩葉

わたしの住む板橋区弥生町には、神田流弥生ばやしという祭りばやしがあります。明治の初めごろ弥生町に住んでいた石田滝蔵さんが、神田で建具職（大工さんのような仕事）の修行をしていた時に覚えた神田ばやしを、近所の若者に伝えたのが始まりです。その後戦争で消えなかったおはやしを、石田滝蔵さんの直弟子の栗原佐吉さんがアレンジしてできたのが神田流弥生ばやしです。昭和三十三年に弥生町の子ども達を中心にして弥生ばやしが結成されました。そして昭和五十八年には、板橋区指定無形民俗文化財の保存団体に認定されています。

わたしは今、この弥生ばやしを習っています。わたしの兄は、小学校のふるさと学習で弥生ばやしを教わってから、毎週おけいこに通うようになりました。兄のおけいこについていくうちに、先生から「たいこをたたいてみる？」と声をかけられたのがきっかけで始めました。実際にたいこをたたいてみると、気持ちがスッキリして楽しいのです。もう一つの楽しみは、おやつ時間です。おけいこのとちゅうの休けい時間にお菓子とお茶をいただくのですが、みんなでおしゃべりしながら食べると足のしびれもふき飛びます。

先生は子どもの時の話を時々してくださるのですが、師匠（栗原佐吉さん）は、おけいこはもちろん、礼ぎ作法にもきびしく、よくおこられていたそうです。そんな中あめや、おせんべい、さつまいもなどをいただくのが何よりも楽しみだったとおしゃっていました。だから今もおやつ時間があり、わたしも楽しく、おけいこに通っています。

わたしが今習っているのは、しめだいこ（しらべ）です。しらべには上下があり、二人でたたきます。そのほか、大だいこ（おおかわ）、笛（とんび）、かね（よすけ）がそれぞれ一人、五人でえんそうします。しらべは、リズムをとるのがむずかしいけど、なれてくると、とんびの音に合わせてたたけるようになるので、五人の音が合うとうれしいし楽しいです。なかなかピッタリ合うことはないのですが…。

今も弥生ばやしがこの地に受けつがれているのは先生方が教わる立場から教える立場へとおはやしを伝え続けてくださっているからだと思います。そのおかげでわたしも弥生ばやしに出会えました。最初はただ楽しいというだけで始めた弥生ばやしですが、深く知るうちに板橋区の伝統芸能神田流弥生ばやしを残したいと思いました。

この二年間はコロナの心配もあり、おけいこがお休みになってしまいましたが、少し前から再開できるようになりました。お祭りは中止になって、みなさんにひろうできていないですが、学ぶことはたくさんあり、これからもおけいこをがんばりたいと思います。

弥生ばやしは、大人から子どもまで参加でき、地いきのつながりを深めてくれます。お祭りでひびきわたるおはやしの音は、町を明るく元気にする特別な物だと思います。

みなさんに神田流弥生ばやしをもっと知ってほしいです。きょう味のあるひとは、ぜひ体験にきてみてください。

商店街の昔と今、そしてこれから

板橋区立金沢小学校5年 ながむら たまき 長村 環

僕は三歳の時に東京都の板橋に引っ越してきました。僕はこの街が好きです。池袋まで電車で一駅なのに自然が多く、家の近くの石神井川は春になると桜が満開に咲いてとてもきれいです。大きな公園もたくさんあります。近所の仲宿商店街には安くて美味しいお店もたくさんあって家族でよく行きます。

仲宿商店街にある米屋が最近リニューアルされておにぎりやお弁当などを売るようになり、その二階にはカフェが出来ました。いつも人で賑わっていてとても人気があります。このお店の建物は築百年を超えているそうです。このお店の近くに小さい時にお父さんとよく行っていた銭湯があったのですがそこもまた築百七年の歴史ある銭湯だったそうです。しかしそこは少し前に潰れてしまい今ではマンションになっています。

普段はあまり意識していませんでしたが、この仲宿商店街には歴史があるようです。僕は仲宿商店街の歴史について調べてみることにしました。夏休み、お母さんのすすめで板橋観光センターに行ってきました。ここは僕が通った幼稚園の近くにあり、小さい時から知っていましたが板橋に観光する場所なんてないのではないかと、思っていて、気にはなっていたけれど今回は初めて中に入りました。

板橋観光センターには江戸時代の仲宿商店街の模型が展示されていました。江戸時代の仲宿商店街は今と変わらない形で、道路と両脇に家やお店がありました。もちろん今と建物の形のほとんどは違うけれど町の形は今と変わっていないことがわかりました。

次に観光センターでもらったいくつかのパンフレット、そしてインターネットで仲宿商店街の歴史について調べてみました。仲宿は江戸時代に徳川家康によって整備された五街道の一つで、江戸の日本橋と京都の三条大橋を内陸経由で結ぶ、中山道の宿場町だった「板橋宿」の一部でした。宿場町、とはなんとなく旅人を泊めるための旅館のようなものがたくさん並んでいることを想像していましたが、調べてみると旅人がそこで泊まるための宿だけでなく、旅人向けに商売をするための商店や茶屋などたくさんのお店がありました。そしてそこで商売する人たちが住み着くのでそこには住宅もあったようでした。「板橋宿」は江戸から京都に向かう人にとっては最初の宿場でもある重要な宿場でした。「板橋宿」は上宿、仲宿、下宿の三つで成り立っていて、仲宿商店街のある仲宿は大名が宿泊する本陣がある中心的な存在だったそうです。現在、本陣だった場所はスーパーマーケットになっています。僕もこのスーパーマーケットに家族とよく行きますがまさか四百年前にこの場所に本陣があったとは思いませんでした。今と変わらず、昔もこの街はとても賑わっていたことが想像できます。

普段当たり前のように歩いている仲宿商店街も意識しながら歩くと色々なことが気になります。築百年の米屋の建物をリニューアルした板五米店の店内が気になりました。ここ

のお弁当やおにぎりは食べたことがありますが入ったことはありませんでした。店内に入ると百年前の柱や板の間がありました。ただ、古い感じはしません。全体的にはとても古い建物ですが新しく整備された場所もありとても綺麗です。家族で出かけた川越の街のお店を思い出しました。そこも古い建物をリニューアルしてカフェやうどん屋さんなどになってたくさんの人で賑わっていました。古い建物を残しながら新しく綺麗にしていくことは今の人も古い建物の歴史を感じながら訪れることができるので歴史を継承していると思いました。

この仲宿商店街は四百年以上街の形が変わってなく、そこは昔宿場町で本陣がある重要な場所だったこと、百年を超える建物が今もまだ残っていて活用されている歴史がある街であることが分かりました。うまく言葉にできないけれど自分の街に歴史があることやそれを感じられることはとても良いことだと思います。

僕の家近くの板橋、十条、大山の駅前で大きな再開発が決まっています。この三つの駅前には商店街があります。どの駅にも大きなタワーマンションやビルができるそうです。タワーマンションに住みたいとも思うし綺麗なビルができて人で賑わうのはとても良いことだとも思います。お父さんに再開発でどんなお店が入って欲しいか聞いた時、「カクイツテキな街にならないようなお店が入ってほしい」と言っていました。カクイツテキとは個性がないという意味だそうですが僕もそう思います。僕の住んでいる町の個性は大きな商店街とその商店街の土地の歴史だと思います。きっと再開発が決まっている駅前の商店街にも同じように歴史があってそれが個性になっていると思いました。建物が百年残っていることと街が百年残っていることは違います。時代に合わせて街を変えていくことは重要だけれど同じような街にならないように、街の形や歴史を保存することも重要です。そのため板五米店のように建物やその歴史を残しながらリニューアルするような形を街全体で行えば歴史のある街の形を残しながら新しいものを取り入れることができます。

僕の将来の夢は街づくりに携わる仕事をする事です。今回自分の街について調べてみて街には歴史があってそれが街の個性になっていること、歴史を残すことが重要だと分かりました。将来、街の歴史をしっかりと調べてその歴史を活かす街づくりをし、僕のように自分の街が好きになるような個性のある街を作っていきたいです。

おばあちゃんのおまじない

板橋区立緑小学校4年 いとう たいち 伊藤 太一

つい最近、ぼくの足にイボができました。今までは皮ふ科に行って液体ちっそのちりょうをしていたのですが、とても痛い思いを何度もしたので、もう皮ふ科には行きたくないと思っていました。

そんな時、おばあちゃんから「オットノメ」をすると良いと言われ、お母さんがナスのヘタをぼくのイボにぬりはじめました。そして、そのヘタをおばあちゃんの家のおえんの下にうめたのです。何ともふしぎなオットノメでした。お母さんに聞いても「くわしくはおばあちゃんに聞いて」と言うので、ぼくはおばあちゃんに直せつオットノメの事を聞いてみる事にしました。

オットノメとはイボの事で、おばあちゃんが小学校一～二年の時、明治生まれのおばあちゃんに教えてもらったおまじないでした。

正しくは、「オットノメ落した」と三回言いながらナスのヘタでイボをなで、そのヘタを家の外で台所やお風呂などのしっけの多い地面にうめるのです。

ナスのヘタが早くいたんでとけていくように、イボが小さくなってなおると信じられていて、おばあちゃんはずっとこの方法でちりょうして、イボで病院に行くことはないそうです。

しかし、ぼくは本当にナスでイボがなおるのか少し信じられません。

「イボのちりょう」「ナス」とネットで調べてみると、あるクリニックのサイトのいぼのちりょうで「ナスのヘタりょうほう」というものがたしかにのっていました。

こちらはお風呂上がりにイボの大きさに切ったナスのヘタを毎日はおくというちりょうでした。ナスのヘタにかぶれさせ、白血きゅうにウイルスを食べてもらう何とも面白いやり方です。

おばあちゃんの話だけでは少し不安でしたが、クリニックでじっさいにちりょうに使われていると知り、ホッとしました。

そして、さらに調べていくうちに、イボ神様なるお寺やお地ぞう様が日本全国にたくさんある事を知りました。やはり、昔からイボに困っている人はたくさんいたのだと思います。

また、イボ取りのおまじないは全国に色々あることもある。

おばあちゃんに教わったおまじないと少しちがいましたが、秋田県、福島県、新潟県、東京都、大分県でもナスのヘタをイボにこすりつけるおまじないが伝わっていました。

ほかにも面白いおまじないをしょうかいすると、イボにへびのぬけがらをぬる、クモの糸をイボにまく、カミナリがあった時にほうきでなでるなど、本当にそれでイボがなおるのか信じられないようなものばかりでした。

また、「耳袋」根岸肥前守鎮衛著（寛政十年から文化十二年の江戸南町奉行）にいぼ取りのまじないがけいさいされている事も分かりました。

「いぼ取りのまじないにもいろいろあるが、三日月に豆腐一丁を供え、真剣に祈ると治る。不思議なほどである。供えた豆腐は川の中に流し捨てるのが肝心である。まちがってその豆腐を食べたものにいぼができる。これも不思議なことである。」

イボ取りのおまじないはむかしからみんな不思議と思いながらも信じて伝えてきたのかもしれないと思いました。

ふしぎなおばあちゃんのおまじない。じっさいにぼくのイボも少し小さくなってきたように感じます。

「病は気から」ということわざもあるように、もしかしたら「これをやったらなおる」という強い気持ちがイボをなおしてくれたのかもしれない。

AIではきっとかいめいできないこんなふしぎなお話は人からしか伝えていけないと思います。だから、大きくなったらぼくは大切に伝えていきたいです。

平安時代のスイーツについて

板橋区立緑小学校3年 くすもと 楠本 りん 綸

昔の食べ物について、わたしは前から気になっていました。たまたま図書館で、平安時代のスイーツについてのっている本を見つけました。そこで、平安時代のスイーツについて調べてみることにしました。

平安時代は、今からやく千二百年から八百年前の時代のことをいいます。西れきでは、七百九十四年から千百九十二年ごろです。みやこは平安京といい、京都にありました。

平安時代のスイーツは、けずり氷やつばきもち、ほうとうやいもがゆ、からくだものやまがり、むぎなわなどがあったそうです。ドライフルーツも食べられていました。ドライフルーツには、干したなつめ、干し柿、松の実などがありました。

ほかには、なしや小みかんなども食べられていました。本には、わたしがくわしく知らないスイーツものっていました。かっこ、けいしん、ひつら、てんせいのはじめて見るスイーツでした。

しかし、今とちがうところもあります。平安時代には、今のようにさとうは使われていませんでした。なのでスイーツを作るには、さとうの代わりになるものがみつようです。それは、「あまづらせん」という甘味料でした。あまづらせんの原ざい料は、ブドウ科のナツツタという植物です。ナツツタは秋に紅葉して、冬のはじめに葉を落とします。真冬にツタのくきからじゅえきを取り出し、につめたものが、「あまづらせん」です。

ナツツタのじゅえきからあまづらせんを作るのはとてもむずかしいですが、「あまづら風シロップ」なら今でも作るができます。作り方は、水にグラニューとうと三おんとうをくわえて、強火でにつめます。水のりょうが半分にへって色がこくなりとろみがつけば、出来上がりです。

このあまづら風シロップを使って、「いもがゆ」というスイーツを作ってみることにしました。いもがゆは、平安時代は高きゅうなスイーツでした。大和いもにあまいシロップをかけたような、あたたかいスイーツです。また「いもがゆ」といっても、お米の入った料理ではありません。

じっさいにいもがゆを作って食べてみると、大和いもにあまいシロップがかかっていたのでふしぎな味でした。あまづら風シロップがあまくて、大和いもよりシロップの味が強い感じでした。あたたかくて、いもととろとろのシロップがよく合っていました。

さらに、「ほうとう」というスイーツも作ってみました。ほうとうは、まくらの草子という書物の「前の木立高う庭ひろき家の」というお話にも出てきます。中力こと水をまぜ合わせてできる生地に、ジャムやゆであずきをトッピングしたスイーツです。生地の形は三しゅるいあり、細長いものとうさぎの耳の形をしたもの、ねこの耳の形をしたものがあります。生地を作るとき、ねこの耳の形を作るのが楽しかったです。

今回はトッピングをゆであずきにして食べました。生地とゆであずきがよく合っていておいしかったです。生地はもちもちとした食感で Pasta ににっていました。三つの生地だと、ねこの耳の形のものが、一番もちもちとした食感を強く感じました。ほどよくからみあった生地とゆであずき、どちらもおいしかったです。

平安時代ではおくりものやちょっとしたおやつ、びょう人のおみまいとして、スイーツが食べられていたようです。また年中行事の食べ物として、三月三日の草もち、五月五日の五色のちまき、七月七日のさくべいなど、今でも食べられているものもあります。長崎県にはげんざいでも、「むぎなわ」という平安時代のスイーツに似たようなおかしがあります。

平安時代、今からやく千年前の人たちが考えたスイーツは、じっさいに作って食べてみるととてもおいしかったです。千年前の人たちが、よくこんなにおいしいスイーツやおかしを思いついたなと思いました。昔は今のようないぞうこやべんりな道具などがなくて、本当にすごいと思います。

いもがゆとほうとう、どちらもおいしかったので、平安時代の人もきっとみんなで「おいしい」と言っていたのでしょう。今後もほかの平安時代のスイーツを作ってみたいと思います。

戸籍を調べて分かったこと

板橋区立弥生小学校 4年 まつした しゅうのすけ 裕下 周之介

僕は、この夏休みで家族の家系図について調べました。なぜなら先祖にどのような人がいたか知りたかったからです。

英語では家系図をファミリー・ツリーと呼んでいます。

ファミリー・ツリーを日本語でそのまま読むと「家族の木」になります。一人一人が木の枝のように繋がって、家族が一本の木に見えるからです。

先祖の名前やいつどこで生まれて亡くなったかを調べるために戸籍を確認しました。しかし戸籍を読むことは難しかったです。

その理由は二つあります。一つ目は字が読みづらいところです。昔の戸籍は手書きなので書いた人によって字が読みやすかったり読みづらいところです。でも今の戸籍はコンピューターで入力しているのでとても読みやすいです。二つ目は今と違う読み方や書き方の字があることです。例えば「二十日」を「廿日」と書きました。これは異体字と言います。その他にも「エ」を昔はウェと読んでいました。変体仮名や旧字体は今の字と違うので調べる必要がありました。

確認できた中で一番昔の先祖が七世代前で、岩手県北上市で生まれた人がいました。この先祖は千八百十八年（文政元年）に生まれて、千八百八十七年（明治二十年）に亡くなっています。日本は江戸時代でした。千八百三十年（天保元年）に生まれた先祖もいました。

家系図や戸籍から先祖の人数を数えたらだいたい二百五十人いたました。世界中のすべての人に僕のようにたくさんの先祖がいると考えると先祖をたどってみると、同じ先祖の人がいるかも知れません。また、戸籍を見て分かったことは住んでいる場所がだいたい同じだったことです。中には二百年以上前から今でも同じ場所に住んで居る親戚がいるのだと父から教えてもらいました。

また、女の人の名前はカタカナ二文字の人が多かったです。昔は男女平等ではなかったので女の人は名前に漢字を使わせてもらえなかったと考えられているそうです。

今家にある戸籍謄本が役所で取れるすべてのもので、母の先祖の戸籍は関東大震災で焼けてしまったそうです。もっと昔の先祖のことは戸籍が残っていないので分からないことがたくさんあります。そういうこともお墓に行けば分かる場合があるそうです。

お盆に家族でお墓参りに行きました。お墓には墓誌があって誰が何才で亡くなったか分かりました。二十一才で戦死してしまった先祖や二才頃に死んでしまった先祖もいました。

この機会に先祖のことを知ることができました。戸籍を調べた結果、先祖がこうしてしてくれたからこそ自分がここに生まれてこられたと思いました。自分が会ったことのある先祖はとても少なかったです。それなので、戸籍以外の先祖のことを知るためには、今生きている家族に話しを聞いたりして記録を残すことが必要だと思いました。